



〈若い世代へ—私たちはこんなことを考え行動した〉

ジャーナリスト
松本侑壬子

女性の解放運動は、古くは英国のブルーストッキング派から戦後の七〇年代以降の「ウーマンリブ(リブ)」「フェミニズム」そして政府が女性政策に関与し始めると「男女共同参画」と、呼び名が変わってきた。どう呼ばれようと、女性を現状から解放し、人として自由にするための運動であることには違いない。だが、呼び名だけが独り歩きして、まるで特殊な女性の特別の主義主張であるかのような誤解も生まれてきた。フェミニズムは他人事のように感じる女性も少なくない。

この映画は、七〇年代のリブから現在までの四〇数年間のフェミニズム運動の記録映像と代表的なフェミニストたちへのインタビューで構成している。

昨年、戦後最低の投票率の衆院選挙の結果成立した安倍内閣だが、掲げる経済政策重点主義ではとてもやっていけない危機感が社会に蔓延し始めた。

映像の世界でも、おおよそこの期間の内外の出来事—ベトナム戦争、イラク・中東問題、水俣、成田・三里塚闘争、大学紛争などの優れた記録映画を改めて見直し、現代におけるその意味を問い直す骨太な作品が次々に作られている。本作はその女性フェミニズム版ともいえるようか。製作時点(二〇一四年)に活躍中のフェミニスト二人に真正面から向き合いその意見と生き方に肉薄する。過去には津田梅子、平塚らいてう、伊藤ルイなど個別の歴史上の人物の足跡を辿る記録映画はあったが、これだけ多数の個性豊かな女たちをフェミニズムの視点から取り上げた作品はない。一人ひとりの個人史としても多彩だが、また現代女性史の貴重な証言集ともなっている。

松井監督は、この映画作りを主婦の投稿誌「わいふ」の元編集長田中喜美子さんから依頼されるまで、フェミニズ

ムは他人事だったという。準備のために六〇冊ばかりの関連資料を読み、「これは自分のことだ!」と目からうろこだったと。一流大学を出ながら、女の幸福は結婚にありと信じ、夫のDVで離婚後も一人息子を抱えて雑誌やテレビ関係の仕事が続けながら、男社会のメディア業界で排除されないように気を使っていた。映画監督になってから描き続けてきた「ユキエ」「折り梅」「レオニー」のテーマは、すべて女の心の叫びであり、女性が生きることとは、を根底から問いかけるフェミニズムとつながっていることに気づく。映画のタイトルは監督自らのこの確信に根ざす。自身の迷いや過ちを怖れず、自らと向き合い懸命に生きてきたフェミニストたち。過去の自分を含めた多くの無関心派への叱咤激励、将来が不安な若い世代への励まし、男性たちへの呼びかけを含めた「何を怖れる」である。

製作費は、田中さんの私財に加えて全国の草の根の女性たちからの寄付で賄った。昨年のあいち国際女性映画祭に出品した後、今年から全国で本格的に上映活動を開始する。戦争の問題も放射能の問題も、次世代に対する責任は女性も免れない。手をつなぎ共に考える勇気やヒントのもらえる作品だ。



『何を怖れる —フェミニズムを生きた女たち』

日本(ドキュメンタリー)映画(111分)

監督: 松井久子 企画: 田中喜美子
出演: 井上輝子、上野千鶴子、高里鈴代、田中喜美子、
田中美津、樋口恵子他

公開中

上映問い合わせは FAX: 03-3523-0212、E-Mail: info@essen.co.jp まで

© エッセン・コミュニケーションズ